

THOMSON
DELPHION

trail

[Home](#) [About Us](#) [Contact Us](#)

RESEARCH

PRODUCTS

INSIDE DELPHION

[Home](#) [About Us](#) [Contact Us](#)

My Account

Search: [Quick/Number](#) [Boolean](#) [Advanced](#) [Derwent](#)[Help](#)

The Delphion Integrated View

Buy Now: ☒ PDF | [More choices...](#)Tools: Add to Work File: [Create new Work File](#) ☐ [Go](#)View: [INPADOC](#) | Jump to: [Top](#)☒ Go to: [Derwent](#)☐ [Email this to a friend](#)

⌘ Title: **JP54030921A2: FIBER OF ISLAND-IN-SEA STRUCTURE CONTAINING ISLANDS REGULATED IN FINESS AND GIGGED FABRIC THEREFROM**

⌘ Derwent Title: Matrix-multicore conjugate fibre - used by dissolving matrix component to form very fine filaments giving fabric with cashmere-like feel [\[Derwent Record\]](#)

⌘ Country: JP Japan

⌘ Kind: A (See also: [JP57058445B4](#))

⌘ Inventor: ASANO MASAJI;
NIHONGI YUTAKA;
NAKAGAWA JUNYO;

⌘ Assignee: KURARAY CO LTD
[News, Profiles, Stocks and More about this company](#)

⌘ Published / Filed: 1979-03-07 / 1977-08-08

⌘ Application Number: JP1977000095881

⌘ IPC Code: [D01F 8/04](#); [D03D 15/00](#); [D03D 27/00](#); [D04H 11/00](#);
[D05C 17/02](#);

⌘ Priority Number: 1977-08-08 JP1977000095881

⌘ Abstract: PURPOSE: Woven or knitted fabrics from specific fibers of island-in-sea structure are gigged before or after the sea component is removed to produce said gigged fabrics with high-quality wool touch such as kashmir or vicuna.
COPYRIGHT: (C)1979,JPO&Japio

⌘ INPADOC Legal Status: None Buy Now: [Family Legal Status Report](#)

⌘ Family: [Show 2 known family members](#)

⌘ Forward References: Go to Result Set: Forward references (1)

Buy PDF	Patent	Pub.Date	Inventor	Assignee	Title
<input checked="" type="checkbox"/>	US5811040	1998-09-22	Mallonee; William C.		Process of making fiber for carpet face yarn

⌘ Other Abstract Info: None

[Nominate this for the Gallery...](#)

BEST AVAILABLE COPY

FIBER OF ISLAND-IN-SEA STRUCTURE CONTAINING ISLANDS REGULATED IN FINESSE AND GIGGED FABRIC THEREFROM

Patent number: JP54030921
Publication date: 1979-03-07
Inventor: ASANO MASAJI; others: 02
Applicant: KURARAY CO LTD
Classification:
- **International:** D01F8/04; D03D15/00; D03D27/00; D04H11/00; D05C17/02
- **European:**
Application number: JP19770085881 19770808
Priority number(s):

Abstract of JP54030921

PURPOSE: Woven or knitted fabrics from specific fibers of island-in-sea structure are gassed before or after the sea component is removed to produce said gassed fabrics with high-quality wool touch such as kashmir or vicuna.

Data supplied from the *esp@cenet* database - Worldwide

⑨日本国特許庁
公開特許公報

⑩特許出願公開
昭54—30921

⑪Int. Cl.²
D 01 F 8/04
D 03 D 15/00
D 03 D 27/00
D 04 H 11/00
D 05 C 17/02

識別記号

⑫日本分類
42 D 0
47 A 32
47 A 34
47 A 3

庁内整理番号
7199—4L
6636—4L
7425—4L
7199—4L
6364—4L

⑬公開 昭和54年(1979)3月7日

発明の数 2
審査請求 有

(全 7 頁)

⑭島織度がグループ規制された海島構造繊維およびそれを用いてなる立毛布帛

⑮特 願 昭52—95881

⑯出 願 昭52(1977)8月8日

⑰発明者 浅野正司
倉敷市安江550—1

⑱発明者 二本木豊
倉敷市酒津1660

同 中川潤洋
倉敷市酒津1652

⑲出願人 株式会社クラレ
倉敷市酒津1621番地

⑳代理人 弁理士 本多堅

明 細 書

1. 発明の名称

島織度がグループ規制された海島構造繊維およびそれを用いてなる立毛布帛

2. 特許請求の範囲

1. 溶解性を異にする2種以上のポリマーからなり、そのうち1種のポリマーは繊維軸方向に連続した島相として存在する海島構造繊維であつて、当該島相の個数は2～15個、その織度は0.20～2.45 dr の間で2～4グループに区分されるものであり、各グループ間の平均織度の差は0.20 dr 以上、1.65 dr 以下、各グループに所属する島相の織度変動幅は平均織度に対し±20%以内であり、かつ最小織度グループの平均織度は0.8 dr 未満、最大織度グループのそれは0.8 dr 以上であることを特徴とする島織度がグループ規制された海島構造繊維。

2. 特許請求の範囲1において、島相の断面が非円形であることを特徴とする海島構造繊維。

3. 特許請求の範囲1～2のいずれかにおいて、グループ数が3であることを特徴とする海島構造繊維。

4. 特許請求の範囲2において、島相の断面形状がだ円形であることを特徴とする海島構造繊維。

5. 特許請求の範囲4において、だ円形の形状が長軸/短軸が1.3以上であることを特徴とする海島構造繊維。

6. 特許請求の範囲5において、長軸/短軸が1.6以上であるだ円形であることを特徴とする海島構造繊維。

7. 特許請求の範囲4において、グループ数が3であることを特徴とする海島構造繊維。

8. 特許請求の範囲1～7のいずれかにおいて、島相の成分比率が80重量%以上であることを特徴とする海島構造繊維。

9. 特許請求の範囲8において、島相の断面形状がだ円形、島相の成分比率が80重量%以上でありグループ数が3であることを特徴と

する海島構造繊維。

10. 溶解性を異にする2種以上のポリマーからなり、そのうち1種のポリマーは繊維軸方向に連続した島相として存在する海島構造繊維であつて、当該島相の個数は2~15個、その織度は0.20~2.45 drの間で2~4グループに区分されるものであり、各グループ間の平均織度の差は0.20 dr以上、1.65 dr以下、各グループに所属する島相の織度変動幅は平均織度に対し±20%以内であり、かつ最小織度グループの平均織度は0.8 dr未満、最大織度グループのそれは0.8 dr以上である島織度がグループ規制された海島構造繊維を少なくとも一部の編織糸として用いて製編織し、海成分を分離または除去する前か後に起毛処理することを特徴とする立毛布帛。
11. 特許請求の範囲10において、海島構造繊維の島相の織度区分がグループ数3であることを特徴とする立毛布帛。
12. 特許請求の範囲11において、島相の断面

3. 発明の詳細な説明

本発明は、島織度がグループ規制された海島構造繊維およびそれを用いてなる立毛布帛、より詳しくはカシミアあるいはビキューナに似た外観と風合いを有する高級ウール調布帛に関するものである。

海島構造繊維は、海成分を除去すると島成分からなる極細繊維が得られることからスエード調やベロア調の立毛を有する人工皮革の素材繊維として利用されてきており、さらに近年ではこの繊維を用いて布帛を製造する試みも盛んに行なわれてきている。すなわち、海島繊維を用いると製織後に海成分を除去して極細化することができるため従来不可能であつた極細繊維を含む織物の製造が可能になつたためである。極細繊維を有する布帛の利点は、1)極細繊維からくる独特なメモリ感及び良好なタッチ、2)ライティング効果、3)前記の特色を生かすことによるスエード調の風合い出しが可能であることであらう。この特徴を生かしたスエード調布帛の製造技術は、例えば特公昭46

特開昭54-30921(2)

形状がだ円形、島相の成分比率が80%以上である海島構造繊維を用いることを特徴とする立毛布帛。

13. 特許請求の範囲10において、タテ糸に通常のフィラメント、嵩高加工糸あるいは紡績糸を、ヨコ糸に海島構造長繊維を用い、ヨコ糸の浮き数が5以上、8以下である組織となるよう製織することを特徴とする立毛布帛。
14. 特許請求の範囲13において、海島構造長繊維の島相の織度区分が3であることを特徴とする立毛布帛。
15. 特許請求の範囲14において、島相の断面形状がだ円形、島相の成分比率が80%以上である海島構造繊維を用いることを特徴とする立毛布帛。
16. 特許請求の範囲15において、ヨコ糸の密度が70本/1m以上、ヨコ糸とタテ糸のデニール比Aが $1 \leq A \leq 2.6$ であり、仕上りカバーファクターがタテ糸及びヨコ糸とも20以上であることを特徴とする立毛布帛。

-2782、特開昭48-50073、同48-92650、同52-12376、同52-25166等に開示されている。しかし極細繊維に基づくものがたい欠点も存在する。その一つは、布帛にした場合に腰がなく、ダラツキあるいはシワになりやすい点、他の一つは立毛々羽が腰がなく毛先を長くすると着用時に乱れやすく著しく外観を損ねることである。このため、毛先を短かくしポリウレタン等の樹脂を付着させ張りや腰を持たせ、かつスエード調の皮革様に仕上げたもの以外に実用されていないのが現実である。スエード以外の試みとしては、特開昭49-109673、同49-116366等にベロアや超ビキューナ狙いのものがあるが、使用する極細糸の織度構成が悪いことや組織及び織規格等が適当でないためやはりポリウレタン等の樹脂を付着させて皮革様のものとする必要があつた。このため、いわゆる高級ウール服地とは全く異なつた風合いとなつてしまつていた。一方、通常の合成繊維からなる布帛は外観、タッチ、風合いともウールとは全く異なるものしか得られないのも現

突である。

本発明者らは鋭意研究を重ねた結果、上記欠点を改善しポリウレタン等の樹脂を使用することなくカシミア、ビキューナといった高級ウール調の外観、タッチ、風合いを有する布帛の発明に至つたものである。

すなわち、本発明によれば溶解性を異にする2種以上のポリマーからなり、そのうち一種のポリマーは繊維軸方向に連続した島相として存在する海島構造繊維であつて、該島相の個数は2~15個、その繊度は0.20~2.45 dr の間で2~4グループに区分されるものであり、各グループ間の平均繊度差は0.20 dr 以上1.65 dr 以下、各グループの繊度変動幅は平均繊度に対し±20%以内、最小繊度グループの平均繊度は0.8 dr 未満、最大繊度グループの平均繊度は0.8 dr 以上である島繊度がグループ規制された海島構造繊維、および該海島繊維を少なくとも一部の編織糸として製編織し、海成分除去前または後に起毛処理することを特徴とする布帛である。

なるかのいずれかである。0.20 dr 未満の繊維が混在することは、スエードタッチが強くなりすぎかつ発色性が劣るため本発明の高級ウール調の風合いと濃味のある色調が得られない。また繊度構成が特公昭44-13869号公報にみられるように正規分布あるいはそれに近いものである場合には本発明の効果は発揮されず、単一の繊度で構成されるものと類似したものとなる。本発明によれば、各繊度グループの変動幅はグループ平均繊度の±20%以内(0も含む)でなければならず、各グループ間の平均繊度差は、0.20 dr 以上、1.65 dr 以下であることが必要である。グループ数は2~4個で本発明の効果が発揮され、より好ましくは3個である。グループ数が4個である場合は意外にも効果的に最良と言うことはできないことがわかつた。本発明の2~4個にグループ規制された島繊維は、前述の如く海成分除去前の単繊維中でその規制をすでに満足する必要がある、そのときに本発明の効果が発揮される。すなわち、同一繊度の海島繊維を紡糸後に混織した場合に、起毛

特開昭54-30921(3)

長年にわたる本発明者らの研究によれば、合成繊維でウールライクな風合いを出すには0.8 dr 未満の極細繊維が必要であること、2.5 dr 以上の繊維が混入すると合成繊維特有の硬さ、ワキシーなタッチが出て好ましくないことを見いだした。すなわち、0.8 dr 未満の極細繊維を含有させることにより表面のきめ細かなタッチと独特のメモリ感を与え、0.8 dr 以上、2.45 dr 以下の繊維をも混有していることにより合成繊維ライクな外観、タッチを表面に現わさず布帛に張り腰を与え、ウール調の風合いと言つても単に上記条件を満足すれば得られると言うものではなく、島相が2~4個のグループに規制され、かつ海成分除去前の単繊維中でその規制を満足していなければならない。すなわち、単一の島繊度のみからなる海島構造繊維から立毛布帛を製造した場合は、極細繊維の特徴である表面外観とタッチは良好であるが、張りや腰のないものとなるかあるいは張りや腰があつても外観及びタッチがいわゆる合繊ライクなものとなる。

により毛羽量の斑によるパタリングあるいはモアレ状の斑ができ、それを染めると濃淡のイラツキが発生する。さらに着用時に毛先が乱れやすくビル状のももくれが生じ、商品価値を著しく低下させる。本発明によれば、グループ規制された島繊維が単繊維中にすでに混在しているために立毛化した場合、天然繊維に酷似した外観とタッチを与える。

本発明者らの研究によると、島繊維の断面形状は立毛布帛の外観光沢と密接な関係を有し、真円形の場合には日光の下で合成繊維特有のキラキラした光沢が現われ、商品価値をかなり低下させる場合があることが認められ、とくに島繊度が0.4 dr 以上のものが含まれるとこの傾向は顕著である。それに対して、非円形断面になるとこのキラツキが消え落ちついた深味のある光沢を与えることもわかつた。より好ましくは島形状がだ円形の場合であり、この場合は天然繊維とくにカシミアあるいはビキューナに類似した好ましい光沢と艶を有する立毛布帛を得ることが出来る。そして、

だ円形においてもとくに長軸/短軸が1.5以上より好ましくは1.6以上約3程度までのだ円形であることがこれらの効果から見て望ましいことが認められた。とくに長短軸比が1.6以上であるだ円形の場合には、以下の実施例に示すようにギラツキが失くなるばかりか、腰、ヌメリ、ふくらみと言ったカシミア、ビキューナ調布帛に要求される基本的性能においても優れたものとなる。

本発明に言う立毛布帛とは、前記島織度がグループ規制された海島構造繊維を少なくとも一部の編織糸として用いた製編織物を、海成分分離または除去の前または後に起毛処理してなる立毛布帛であり、製編織物とは上記海島構造繊維を長繊維、紡績糸、嵩高加工糸あるいは他の繊維と一部混用して編織糸として供給されてなる織物、編物及び織布にタフティングしてなるものを言い、より好ましくはタテ糸に通常のフィラメント、加工糸または紡績糸を、ヨコ糸に前記海島構造長繊維を用い、ヨコ糸の浮き数が3~8である組織で製織し、海成分除去の前または後に起毛して成る立毛布帛

であり、このとき本発明の特徴がより効果的に発揮される。本発明に言うヨコ糸の浮き数とは、織組織において一つの絡合点から次の絡合点までに越えるタテ糸の本数のことである。より好ましくはヨコ糸の浮き数が3~8であり、布帛の表と裏が同一組織となる如く製織し、海成分除去前または後の起毛の際に表と裏の両面を起毛する立毛布帛である。両面起毛することにより生地につくらミが付与され、ウールライクな風合いとなる。さらに本発明の特徴である極細繊維からなる布帛でかつ張りや腰のある高級ウール調の織物の風合いをだすためには、織物中のヨコ糸とタテ糸のヤーンデニール比Aを $1 \leq A \leq 2.6$ とし、かつヨコ糸の密度を70本/10以上、タテ糸及びヨコ糸の仕上りカバーファクターCがともに20以上であることが特に好ましい。ここで、Aがこの範囲外であるときには一方方向にしわが入つてしまつて織物としては好ましくない。かかる織物を得るためには、従来の如く海成分が30~70%も含まれている海島構造繊維では、織物の打込み密度に限

界があり現実的に不可能であり、海成分が20%未満でなる海島構造繊維の利用により好適に達成できるものである。この織物規格と前述した島織度のグループ構成により特に良好な高級ウール調の風合いを出すことが可能となつたものである。

本発明に言うA及びCとは

$$A = \frac{\text{海成分除去後のヨコ糸のデニール}}{\text{タテ糸デニール}}$$

$$C = \frac{\text{仕上り密度} \times \sqrt{D}}{72.9}$$

但し、 $D = dr \times (1 + \frac{8}{100})$ 、drはタテ糸またはヨコ糸のデニール、8は加工収縮である。

本発明に言う島織度がグループ規制された海島構造繊維は、例えば特公昭44-18369等に提案されている多芯A鞘型方式を改善することによつても得られるが、本発明者らが特願昭51-94224、特願昭51-130250等で提案している方法によるのが特に好ましい。

本発明の島織度がグループ規制された海島構造繊維に用いられるポリマーの組合せとしては、公

知のあらゆる紡糸可能な溶解性の異なる2種または3種以上のポリマーを用いることができる。代表的な例としては、ポリエチレン、ポリプロピレン等のポリオレフィン、アイソタクトックまたはアタクチックポリスチレン、アルキルまたはハロゲン置換のポリスチレン、6-ナイロン、66-ナイロンの如きポリアミド、ポリエチレンテレフタレート、の如きポリエステルおよび第3成分を共重合してなるポリエステル類、ポリメチルメタアクリレート、の如きポリメタアクリル酸エステル、各種アルデヒドにてアセタール化したポリビニルアセタール、ポリビニルアルコール、ポリ塩化ビニールの如きポリハロゲン化ビニールあるいは各種の縮合系または重合系低分子物質の共重合物、または各種高分子物質に対し各種低分子物質をグラフトしたグラフトポリマー等を含み、さらに前記ポリマーに熱安定剤等の各種安定剤、顔料、艶消剤等の添加剤、その他公知の添加物を20%以下含むものも包含する。

以下本発明を実施例を示して具体的に説明する

が、本発明はこれら記載例に何ら限定されるものではない。

なお、本発明にいうポリエチレンテレフタレート
の極限粘度 $[\eta]$ (dl/g)とは、30℃のフェノール：テトラクロルエタン(1:1)の混合溶媒で測定したものである。

実施例 1

海成分として高圧法ポリエチレン、島成分として $[\eta]=0.68$ のポリエチレンテレフタレートをそれぞれ重量比10:90で特開昭51-130250で提案した混合紡糸装置へ供給し紡糸した。続いて、ローラープレート式の延伸機で3.7倍延伸した。単繊維中には、島繊維が0.5、0.9、1.3 drと3段階のグループに分かれ、同一グループ内の繊維変動幅がそれぞれ15%、10%、6%で、その島数は各々4、4、2本から構成され、島形状がだ円形で長軸/短軸の平均の値が2.2(各々1.4、2.1、3.1)となる島繊維がグループ規制された350 dr/40 fの海島構造繊維を得た。このものに100回/mのヨリを加えヨコ糸とし、タ

テ糸には通常のポリエステル加工糸150 dr/48 fを用いて第1図に示す組織で組織した。このものを90℃のパークレン中で処理し海成分を除去し、ドイツ式起毛機で裏面を10回起毛し、次に表面を10回起毛した。続いて190℃でヒートセットし、ビーム染色機でキヤメル色に染めた。仕上剤を付与した後にブラッシングとアイロニングを行ない仕上げた。得られた立毛布帛の目付は290 g/m²であり、タテ糸及びヨコ糸の密度が140本/in、83本/in、タテ糸及びヨコ糸のカバーファクターが25、28であつた。この布についてビリング(ICI法、10時間)、450カンテレバーと耐シワ性(モンサント法)を測定するとともに、秋冬用紳士スーツ地に対する風合特性値KOSHI、NUMERI、FUKURAMI(「風合い評価の標準化と解析」：日本繊維機械学会出版-風合い計量と規格化研究委員会により提案されている方法による)を測定した。

カンテレバー(=)	タテ 42	ヨコ 35
耐シワ性(%)	タテ 84.4	ヨコ 81.6
ビリング(級)	4~5	
KOSHI	4.5	
NUMERI	7.8	
FUKURAMI	8.5	

織物表面は毛先の長さが1~4 mmでかつデニールの異なるものが混在しており、綾目が見えない程度に豊富な毛でおおわれていた。そのため、艶と深みのある独特の光沢を有していた。NUMERIが7.8であり、メモリの優れたピキューナ調のタッチであつた。ふくらみが非常に大きく、かつ適度の張りと腰を有しており、高級ウール調の風合いを有していた。耐シワ性も十分あり、ビリングが立毛織物であるにもかかわらず4~5級と非常に良好であつた。

比較例 1

海成分としてポリステレン、島成分として $[\eta]=0.63$ のポリエチレンテレフタレートを特公昭44-18369号の多芯々鞘型の紡糸装置に海成分

45%、島成分55%となるごとく供給し、海島構造繊維を紡糸。延伸し、単繊維中の島数50本、島繊維が0.1 drで断面円形の繊維変動がほとんどない273 dr/30 fの海島構造繊維を得た。このものを2本を合糸して双糸とし、実施例1と同じ組織及び後加工を行なつた。但しヨコ糸の海成分除去後の繊維はほぼ等しいが、製織時では太いためヨコ糸打込みが58本/インチが最高であり、従つて仕上り布のヨコ糸密度は65本/インチであつた。得られた布帛の測定値はつぎのとおりであつた。

カンテレバー(=)	タテ 40	ヨコ 23
耐シワ性(%)	タテ 87.0	ヨコ 51.3
ビリング	4~5級	
KOSHI	2.7	
NUMERI	8.2	
FUKURAMI	6.7	

織物表面は2 mm程度の密な立毛でおおわれているが短いためにやや綾目が目立つた。メモリア感が強く、ライティングがあり、スエードライクな外

観およびタッチであつた。カンチレバーの結果からもわかるように、ドレープ性はあるが張りや腰不足でだらつきがあり、タテ、ヨコのバランスがくずれておりシワになりやすいものとなつた。

実施例 2 3 4 および比較例 2 3 4

島成分がポリエステル、海成分がポリエチレンからなる第1表の海島構造繊維をヨコ糸とし、タテ糸にポリエステル加工糸 150 dr/48f を用い第1表に示す組織で実施例1とほぼ同じ方法で立毛布帛を作つた。

第 1 表

例	(海/島)	島の断面形状 (長軸/短軸)	グループ平均織度 (dr)	変動係数 (%)	単位長さ中の島の数	組織
実施例 2	17/83	だ円形 (1.3)	0.5 1.5	10 10	5 5	A
実施例 3	10/90	だ円形 (1.6)	0.4 0.85 1.5	18 12 4	6 4 1	B
実施例 4	10/90	だ円形 (1.6)	0.4 0.85 1.5	18 12 4	6 4 1	C
比較例 2	10/90	円形 (1)	0.5	100	32	B
比較例 3	55/65	だ円形 (1.6)	0.1 0.6	17 13	10 2	B
比較例 4	10/90	円形 (1)	1.5	13	5	B

※ 組織 A は第 2 図、B は第 3 図、C は第 4 図にそれぞれ示されている。

得られた立毛布帛のヨコ密度及び測定値を第 2 表に示す。

第 2 表

例	ヨコ密度 (本/インチ)	ピリング (級)	耐シワ性 (%)	KOSHI	NUMERI	FUKURAMI
実施例 2	82	3~4	79×70	4.2	7.3	3.9
3	82	4	80×80	4.8	8.0	8.9
4	70	4	75×73	3.3	5.0	4.2
比較例 2	77	3	79×59	2.7	6.2	4.8
3	63	4	83×51	2.2	7.7	5.3
4	79	1	90×88	5.2	2.0	4.2

実施例 2 の起毛は片面のみ 1 6 回起毛した。表面外觀及びタッチは良好であるが、表裏の差が大きくふくらみが小さいため高級ウール調織物としてはやや劣っていた。実施例 4 は、ヨコ糸の浮き数が 2 であるため裏面 10 回、表面 16 回の起毛を行なつたがまだ毛の量が不足であり、張り、腰、フクラミとも劣っていた。比較例 2 は 0.5 dr を中心に正規分布に近い織度差を有するものであるが、本発明のグループ規制されていないためにタッチは良好であるが、張り、腰がなく、ヨコ糸方向の

耐シワ性が特に小さいため仕立てえせず、かつ着用時にベーパーライクなシワができ商品価値を低下させるものであつた。比較例 3 は、グループ規制を行なつたが 2 グループとも 0.8 dr 未満であるため比較例 3 と同様の結果となつた。比較例 4 は、メモリがなく表面が乱れており、合織の使いタッチと、さらに島 dr が大きくかつ形状が円形であるために日光の下では激しいキラッキ(グリッター)が現われ、合織特有の外観となつた。比較例 2 及び 4 は、ブラッシングと逆方向に撫でると毛先がももくれ商品価値を下げた。実施例 3 の立毛布帛は、ふくらみが非常に良好でありかつ張り、腰があり、表面タッチは高級ウール織物の独特の好ましいメモリを有しかつ落着いた深味のある光沢と艶を有していた。このものを日光の下に置いたが合織織物に見られるキラッキは見られなかつた。このものは高級ウール調の風合いを有しかつピリング、耐シワ性能も満足のいくものであつた。この布帛から紳士コートを縫製したところ、非常に仕立て映えのする高級感に富んだものとなつた。

組織図の一例であつて、×印はタテ糸が表面に、
無印はヨコ糸が表面に浮いていることを示す。

特許出願人 株式会社 クラレ
代 理 人 弁理士 本 多 堅

極細繊維を使用しているためにしなやかで体によくフィットし軽くて着心地の良いものであつた。毛先のももくれ、ピリング等の問題は全くなかつた。このものをドライクリーニングしたが、形くずれはなくブラッシングを行なうと毛先の方向性ももと通りとなつた。

比較例 5

グループ織度、変動幅、単繊維中の島数が下記の通りである島形状が円形である海島構造繊維を用いたこと以外、実施例3と実質的に同じ方法で立毛布帛を作つた。

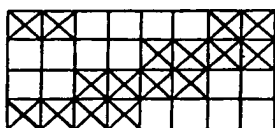
グループ平均織度(dr)	単繊維中の島数	変動幅(±%)
0.4	6	14
0.85	4	14
1.5	1	7

風合い、性能とも実施例3の布帛とほぼ等しかつたが、直射日光下で見るとギラギラした光沢が現われ、高級感のやや劣るものであつた。

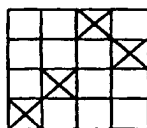
4. 図面の簡単な説明

第1～4図は実施例及び比較例で用いられる織

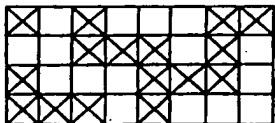
第 1 図



第 2 図



第 3 図



第 4 図

